

西川潤教授年譜

1936年9月22日

台湾台北市大正町2条で西川満（台湾日日新報記者）と澄子の長男として生まれる。西川満は新聞記者の傍ら、『文芸台湾』を主宰していた。大正町は今日、林森北路となる。祖父西川純は会津若松市長秋山清八（肖像画が会津若松市議会の議場に掲げられている）の3男で、戊辰戦争で家系の絶えた（今日、飯森山に白虎隊の一員として切腹した西川勝太郎の墓がある）西川家を継いだ。軍人になり、日露戦争の旅順の戦役で負傷、退役後、台湾に一家で移住し、ガス会社を始める。傍ら、炭鉱会社を台湾人2名（黄子欽氏と王志賢氏）と共同経営した植民地企業家。台湾在郷軍人協会会長で、台北市議員をも勤めた。幼時、自宅の大広間に人がつめかけ、宴席が開かれていたのを憶えている。西川満は早稲田大学文学部仏文学科で、吉江喬松の下でプロヴァンス文学を学び、師の地方文学振興の志を受けて、台湾に帰った。

1939年

潤満3歳の記念として、父西川満が潤の片言を採取し、『カタコトの歌』（日孝山房）を出版。最初の本となる。

「ブウブウ ニ ノッテ
チチポッポ ニ ノッテ
ボーボー ニ ノッテ
チンチンデンシャ ニ ノッテ
ジュンボチャン
アーッチ
イッタ」（「潤の大旅行」）

幼時に東京に旅行したことは、後の引揚船体験と共に、忘れ難い思い出となったようである。

1943年4月

台北市樺山小学校（既に国民学校と名称を変えていた）に入学。同窓会は「樺の葉」同窓会と名乗り、1980年代に復活、2005年まで毎年会合していた。

1945年8月

終戦の天皇勅語を疎開先の父たちが経営していた樹林炭鉱で聞く。台北市に戻る。昨日まで威張っていた日本人たちが、敗戦、引き揚げの決定と共に、道路にごさを敷いて、家財道具を二束三文で売り払う光景が目につけている。世の中が永劫不変とは限らないことを実感。

1946年4月

引揚げ。リュック一つで皆行列をつくり、リバティ貨物船に基隆港から乗る。乗船時にGIからDDTを頭から振りかけられる。和歌山県田辺市に上陸。遠い親戚を頼り、一家はばらばらに。潤は母と共に山梨県日下部町の農家で生活。ひもじさの時代を経験する。

1947年7月

父が東京杉並区阿佐ヶ谷に引揚寮を見つけ、ようやく一家集合。復員した叔父、別途引き揚げた叔母の一家もそこに転り込み、10畳の部屋に3家族13人が暮す。潤は杉並第9小学校の4年に転入。初めて開いた母国の教科書が大部分墨で黒々と塗りつぶされているのにショックを受ける。

1948年4月

吉祥寺の成蹊中学校を受験し落第。成蹊の先生に紹介され、近所の武蔵境にある盈進中学校に入学。中島飛行機会社のバラック寮を利用して開設された、1クラス10数名の小さな私立中学校だったが、丸山理事長は教育に志を持った人格者だった。社会党都議会議員だった阿部眞蔵校長、理事長の娘婿で、後に作家として名を成す小沼丹ら、個性を持った先生方が教えていて、みな粗末な長屋住まいだったが、人格形成に強烈な影響を受けた。ある日、学校が休みと知らず登校し、宿直の春日先生（理科）に「ああ損した！」と感情をぶちまけた。春日先生は逆に「世の中に損することなどない。損したと思ってもそこから学べば得したことになるだろう」と諭された。気持ちの持ち方一つで世の中が明るくもなれば、暗くもなることを学んだ。中学校入学後間もなく、父が阿佐ヶ谷の近所に一軒家を見つけて移る。以来、60数年をこの阿佐ヶ谷北4丁目の家で過ごすことになる。

1951年4月

早稲田大学高等学院を受け、合格。同学年のフランス語級に河野洋平（現衆議院議長）、大久保直彦（公明党前議員）ら後に政界で活躍する人びとがおり、後に文芸春秋誌のグラビア写真の紹介で石渡利康（東海大学教授、北欧政治）と4人で肩を並べるが、当時は後年の有力政治家と同じ机に向かっているとは思ってもいなかった。

1954年4月

早稲田大学第一政治経済学部経済学科に高等学院から進学。クラスの成績は首席で担任の長谷川信先生から「あまり勉強するな」と言われるが、特に勉強に励んだ記憶はない。当初、父の影響があり、文学部志向だったが、同級の山内一郎君の父『チボー家の人々』の記者山内義雄先生に、「文学をやるなら政治経済の知識を持て」と忠告されて、政経学部に向向転換。

1954-55年

大学で青春を謳歌。仏文クラスにもぐり聴講に行き、詩人大木惇夫の次女毬栄さんに一目惚れして仏文クラスに居座る。同じクラスに後の映画監督実相寺昭雄がいた。大木さんは後に中央公論社の敏腕編集者、文芸誌『海』編集長として活躍する宮田毬栄さん。彼女にメーデーに誘われ、かつてない気分の高揚の中でそのまま学生運動に身を投じる。当時の早稲田の学生運動家は、文学部のロシア文学者松尾隆教授（日本平和委員会理事）の家によく通った。早稲田界隈の長屋の二間暮らしの家で座敷の天井まで本がうず高く積み重なっていた。どうして本を引き出すのか、不思議でならなかった。文字通り清貧の暮らしを貫いた先生で、58年に亡くなった際、政経学部自治会委員長の弔辞を代筆した。

山内先生と松尾先生は共に、ジョン・ラスキンのことをよく口にされた。マルクスと異なる社会改革へのアプローチがあることを知る。大学生活でのこの2人の先生の影響は大きい。

政経自治会委員として、当時早稲田大学がミシガン大学経営学部と結んだ協定を「産学協定」と批判

して結成された全学協議会の副議長に。ミシガン大学の協定破棄を迫って大浜信泉総長と膝詰め談判をしたこともあるが、後の学生運動のように先生を缶詰にするということにはなかった。この頃砂川基地の土地収用反対の座り込みに参加し、警棒で手痛く殴打される経験も。またこの頃、毎年8月の原水爆禁止世界大会に早大代表として夜汽車で長崎に行き、網棚の寝台の上で、後にベ平連の活動家となる吉川勇一（当時は日本平和委員会）と知り合う。57年に学生運動に挫折した後も、原水爆禁止日本協議会（当時の事務局長吉田嘉清）の主催する原水爆禁止世界大会の事務局を手伝い続けた。後の広島市平和研究所長福井治弘、初代ニューズウィーク日本版編集長で『ベストアンドブライテスト』の訳者、浅野輔らが仲間だった。後の評論家北沢洋子がアジア・アフリカ連帯委員会事務局勤務でカイロに行くため、原水禁運動の見習いに来た。「はきだめに舞い降りたツル」の感じで、眩しく見る。足かけ6年に及ぶ原水爆禁止世界大会運営へのコミットメントを通じて、国際感覚がずいぶん養われたと思う。この時期、義理の従兄の中央大学仏文学の助教授池田一郎（後のシナリオライター、作家の隆慶一郎）宅に入り浸り、マージャンでしばしば徹夜。マージャンでツモる夢を見るようになり、これでは駄目だとマージャンとは絶縁。

1955-59年

学生運動から足を洗って後、学部のゼミではフランスから帰国したばかりの岡山隆助教授のゼミでハロッドの国際貿易論を学び、当時流行りとなり始めた「低開発国の経済発展」について卒業論文を書き、提出する。かたわら、大木稔さんの卒論「サルトル」を手伝い、実存主義オタクとなる。実存主義は個人の自立を教えたが、後年振り返ってみると、自我主義的な行動と人の目に映るだろう面もあり、自分の未熟さを後で感じさせられることにもなった。やがて、NGO、連帯経済、市民社会のような中間団体論に入っていくのは、その反動があるのかもしれない。だが、「自分のことは自分でやる」習慣はこの頃から身につけた。

就職試験で商社・旅行会社を受けるが共に失敗。もっと勉強する必要を感じ、学生時代によく通った京都生活に憧れて、京都大学に学士入学することを決意した。その時帰りの電車の中で、学院時代のフランス語の先生、斉藤一寛（故人、後の教育学部長、早稲田大学理事）に偶然出会い、この考えを口にしたところ、即座に「早稲田に残りなさい」とたしなめられ、斉藤先生に政経の山川義雄教授を紹介された。山川教授の下でフランス経済学史、思想史を学ぶことになる。

1959年3月

早稲田大学第一政治経済学部卒業。大学院入試で山川教授に「何をやりたい」と尋ねられたので、「世の中の成り立ちが判るように一番古いところをやりたいです」と答えた。早稲田大学大学院経済学研究科入学。この時期に東京日仏学院で2年間の「フランス文明」コースを首席で卒業。63年からアングレース院長（後にリヨン大学教授）の秘書として勤務。山川教授と私2人だけのゼミで、教授はマックス・ウェーバーの「プロテスタンティズムと資本主義の精神」を扱ったフランス人学者の「カルヴァン経済思想」を選び、1年間、この本を教授と輪読した。山川先生とその師の久保田明光教授には徹底的な原典主義、フランス的実証主義を叩き込まれることになる。

1961年3月

『カルヴァン経済思想の成立』をテーマとして約500枚の修士論文を提出し、経済学修士。修士論文は3部提出義務で自分用と合わせて4部コピーが必要だが、このころコピー機はなく、政経の仏独語混合クラスの酒井農史（後の早大法学部教授）ら親友・友人たちが5-6人、1週間ほど半徹夜を続けて論文を書き写してくれた。4月、早稲田大学大学院経済学研究科博士後期課程入学。学部から大学院に進学するときには随分迷いがあったが、博士後期課程への進学には迷いはなかった。「学問の道を歩む」決意までは出来ていなかったが、やりかけの資本主義社会成立の秘密を自分なりに解き明かそうとする熱意は強かった。この頃、父は「売れない文士」で家計は楽ではなく、私が本屋でぜひ欲しいと思った本が買えず、母が4巻の「哲学講座」の値引き交渉をしているのを襖の隙間から見た。父母が呑気な子どもの勉学への熱意を支えてくれた努力には頭が下る。

1961-63年

博士後期課程の当初の2年間はフランス留学というルールを前の準備期間だった。審査員の高橋幸八郎教授に挨拶に行った。

1963年8月

フランス政府給費留学生試験に合格。日仏学院学生の会で書記を勤めていた飛田美智子、関根陽子（後に歴史学者故二宮弘之夫人）、また同期の芳賀徹、蓮實重彦（後の東大校長）らと渡仏。横浜からナホトカまで船で、ナホトカからハバロフスクまでは鉄道、ハバロフスクからモスクワまで飛行機、モスクワからパリまで車で2週間かかったが、最安値のコースだった。

1963-68年

当初の2年間はストラスブール大学神学部にて在籍し、「カルヴァン思想の成立」のカギとなるストラスブールにおけるマルティン・ブツェルの教団形成を調べる。市中央のイール島の神学部寮で寝起きをし、対岸のプロテスタント図書館の古文書を渉猟する。週1回、改革思想史の権威フランソワ・ヴァンデル教授のセミナーを聴講。同期に神学者田川健三（『イエスという名の男』1980年）がいた。その間64-65年にかけて『エコノミスト』誌の山本進編集長の配慮で同誌特派員として、アフリカ諸国を回り、四宮圭の筆名で同誌に独立前後のアフリカ・ルポを連載（後に三省堂より『アフリカの非植民地化』として公刊）。カイロ在住の北沢洋子から、民族解放運動の指導者たちを紹介してもらったことが取材にとっても役立った。このアフリカ旅行では、ニジェールの市場でマーケット・マミーたちの賑やかな店が並ぶ裏側で、痩せさらばえた老婆たちが僅かな野菜を数点汚れたむしろに並べて座っていた姿が臉に残っている。第3世界の裏側に第4世界があることを知った。丁度、ラテン語と古ドイツ語文献の読解に疲れていた時でもあり、またこの旅行でヨーロッパ近代資本主義の形成にアフリカ植民地の果たした役割が大きかったことに目を見開かれたこともあり、学問的関心が、ヨーロッパ経済史から南北問題へと移行した。64年4-7月にジュネーブで最初の国連貿易開発会議(UNCTAD)が開かれたことにも大きな影響を受けた。66-67年にかけて、日本揮発油が独立直後のアルジェリアで石油化学工場のプラント建設を請負ったが、このプロジェクトでの通訳アルバイトでアルジェリアに通算3ヶ月ほど在住。第3世界の現実に直接触れる。インドシナ戦争に従軍したアルジェリア兵たちのベトナム人妻たちが家から

放り出されて、幼子たちと街路に並んで物乞いしていた姿が今でも印象に焼きついている。これらの事情から、2年間の留学生給費の終わった65年秋からパリへ移住。

1965年8月

学生時代、「アジア・アフリカ作家会議」の開催を手伝った縁で、その事務局長、堀田善衛に頼まれ、同氏の『ゴヤ』(4巻, 新潮社, 1974-77)取材の案内兼運転手として、パリからピレネー山脈を越え、東のサラゴサから西南端のカディスまで、ゴヤの足跡を追い、5500 kmを走破。飛田美智子が同行。

1966年6月

飛田美智子とジュネーブで結婚。潮(1969年生)、穂(1973年生)の2子を設ける。

1967年2月

パリで外国人「移住者」として「お客様」のまま暮らしていくか、日本に帰国するか悩んだ末、政経学部の助手試験を受けるべく帰国。ところが乗った飛行機が香港で嵐のため、出発せず、助手試験に1日遅れ、パリに逆戻り。だがそれでかえって決意が固まり、翌年2月には助手試験につつがなくパスする。

1968年4月-70年3月

早稲田大学政治経済学部助手。この間、68年5月にパリの「5月革命」が起こる。帰国早々だったので、5月革命について多くの論文を執筆。傍ら、フランス重商主義期の経済思想について論文を発表する。

1970年4月-72年3月

早稲田大学政治経済学部講師として「経済英書」「経済仏書」「演習」を担当。同期に鴨武彦(国際政治学, 故人), 藤原保信(政治学, 故人), 寄本勝美(地方自治論)らがいる。

この時期にチリ、キューバを訪問し、クーデタ直前のアジェンデ大統領(『中央公論』にルポ掲載)、また、カストロ首相(『エコノミスト』にルポ掲載)と、それぞれ会見。このルポは『第三世界の歩み』(中公新書)に収録。

1972年3月-76年7月

早稲田大学政治経済学部助教授。72年7月に日中国交正常化国民協議会代表世話人として蠟山道雄らと訪中。鄧小平らと面会。このとき、アテンドしてくれた日中友好協会の唐家璇は後に外相、国務委員となる。

1973年-74年

第一次石油ショック、新国際経済秩序など、南北問題が尖鋭化し、19世紀以来の国際分業体制が崩壊した動乱の時期。この時期に、処女作『飢えの構造』(ダイヤモンド社, 1974年)がベストセラーになった。500枚を越える読者カードの半数以上が女性からの感想文で、このカードを読み、南北問題と男女問題に通い合うものがあることを発見。フェミニズムにも関心を持つようになる。

この時期に、朝日新聞の論壇時評を担当した鶴見俊輔氏のアシスタントとして月1回、石神井の鶴見家に通い、鶴見和子の知遇を得る。後に、内発的発展論の研究会に誘われる。

1974年7月

日本平和学会の創立大会に関寛治、川田侃らと参加。理事に選任（1978-81年会長）。1979年に沖縄で初の平和学会大会を開催（『沖縄—自立と平和の展望』早大出版部、1980年）。1983-86年に日本最初の『平和学』講座（4巻、早大出版部）の共同編集、刊行に参画。

1875-76年

『週刊朝日』書評委員

1975年4月-76年3月

読売新聞論壇時評担当

1975年7-9月

雑誌『世界』特派員として、先ずソウルを訪問し、当時在野の政治家金大中をインタビュー。この後、KCIAがずっと私を尾行。KCIAの手口は尾行を相手が判るようにして、恫喝するやり方。爾後、韓国のビザは出なくなる。その後、朝鮮民主主義人民共和国を訪ね、金日成主席と会見。『世界』に「北朝鮮の経済発展」4回（1976年2-6月号）を連載。

1976年8月-77年3月

メキシコ大学院大学 (El Colegio de México) の客員教授として、アジア北アフリカ学部で教える。最初の授業を英語で始めた途端、「Estamos en México. Porqué habla en inglés?」（ここはメキシコだ。なぜ英語でしゃべるのか?）と学生から強烈な一撃をくらい、3ヶ月、CIAの開設したスペイン語学校に1日3時間、週5回通い、日常会話が出来るようになる。とたんに生活費も現地並みの水準で済ませられるようになった。メキシコ滞在の8ヶ月間に週末は地方を訪ね、第3世界の日常の中で暮らす。チアパス州（サパティスタの反乱が後に起こる）の市場で、インディオの婦人が売っている手作り人形の怨めしそうな顔に仰天した。コレヒオ在勤時に、レオンニボルティエヤの『敗者から見た征服』（後に山崎真次訳『インディオの挽歌—アステカから見たメキシコ征服史』成文堂、として邦訳）に接し、同じ歴史が勝者敗者により対照的に描かれるのに深い印象を持つ。

1977年4月-79年3月

読売新聞書評委員。

1978年4月

早稲田大学政治経済学部教授。「経済学史」と「経済英書」、「経済仏書」、「演習」担当。この時期には南北問題の著書が多い。

1979年4月-81年3月

朝日新聞書評委員（第一期）。

1981年4月-83年3月

国連調査訓練研修所 (UNITAR) の特別研究員としてニューヨークに赴任。研究テーマは「地域主義と国連」で、国連というユニバーサルな（を自認する）機関が、地域主義とどのような関係を持つべきか、を調べた。ヨーロッパ共同体以前の地域主義研究は未だ珍しかった。「ASEAN and the United Nations System」(The United Nations, 1983) は公刊されたが、国連と南アジア、太平洋諸国の関係について調

査した他の2報告は、UNITARの経済危機によりお蔵入りとなった。2年間の国連在勤は、世界情勢の見方、国際機関の役割や限界、そして何よりもアメリカ社会の虚実についての視点を与えてくれた。

1983年4月-2005年3月

引き続き早稲田大学政治経済学部教授として勤務。日仏経済学会事務局長として、日仏間の学術シンポジウムや講演会を開催。また、1983年秋-84年にかけて、ストラスブール大学神学部の先輩、森井眞(明治学院大学学長)に誘われ、同大学の国際学部設立に玉野井芳郎、武者小路公秀、多田道太郎らと関わる。新しい国際学部は85年4月に横浜市戸塚区に開校。以後、この学部で「社会思想史」、大学院で「格差研究」を教える。

国連在勤の時期に先進国の社会科学が現実から浮き上がったものであることを痛感し、理論と現実のフィードバックを目指すようになる。当初はゼミの学生諸君と沖縄研修を始める。次いで、学生側からの希望で途上国に出掛けるようになり、中国、台湾、フィリピン、シンガポール、タイ、マレーシア、インドネシア、ラオス、カンボジア等、東・東南アジアのほとんどの国に行っている。東マレーシアのサラワク島に行った時は、黄濁した大河を底の割れたカヌーで横切ることになり、かちかち山よろしく次第に舟底を浸してくる水を缶からで掻き出し、半分沈みながら対岸に這々の体で辿りついたことも。

この時期から、ゼミやOBと現役生の稲門西川会の交流誌、『平和と発展』の刊行を始める。(2006年度で16号を数え、終刊)

1984年10月

総理府(現在内閣府)婦人問題企画推進会議(後に男女共同参画審議会)委員に任命、1999年まで勤める。(1999年~03年は男女共同参画連携会議委員)これまで政府の審議会には農林省(後に農水省)、経済企画庁、環境庁などで関わったが、女性が多数派の審議会は始めて。女性が多数の場合は、タテ前でなく本音で議論がなされることを実感。他の審議会は能面をつけた政官業体制の代弁者たちの儀式だった。

1985年4月-1999年

外務省経済協力局のODA懇談会委員。1986年からは、国際経済学会理事、次いで常任理事(1990-94年)。後に、同学会50周年記念論文集『IT時代と国際経済システム』(有斐閣、2002年)に第12章「南北問題」研究の回顧を執筆。

1984年

NHK市民大学「100万人の経済学」で「世界経済をみる目」を担当した。この時期にはよく知らない人に電車の中で会釈された。

1985年8月

フィリピンの首都マニラのデラサール大学で客員教授として教える。この時に日本では報道されていない深刻な飢餓が同国ネグロス島で広がっていることを学生の募金活動を見て知り、現地に行き、朝日新聞にその実態を報告した。この記事をきっかけとして、フィリピン教会の呼びかけもあり、日本のNGO34グループが集まって日本ネグロスキャンペーン委員会(JCNC)(1986~)が結成され、ネグロス島の救援活動を始める。その副代表となる。

1987-88年

神奈川県平和博物館設置調査委員長として、ヨーロッパの平和博物館を調査し、報告書を執筆。10年後に、この博物館は本郷台に「神奈川地球市民プラザ」（通称 あーすプラザ）として開館。子どもの多文化教育と平和展示を結び付け、NGO活動のベースともなるユニークな設計で、地元の人に大いに活用される施設となった。

1987年4月-89年3月

朝日新聞書評委員（第二期）

1988-94年

神奈川県審議会委員

1988年3月

パリ第一大学客員教授として「日本・アジア経済」を講義。招聘してくれた Denise Flouzat 教授は、カペ王朝のお膝元で純正フランス語の本場トゥレーヌ学区の学監だったので、同女史に招かれ、トゥールの古城に宿泊。

1988-91年

文部省科研費重点領域研究「イスラムの都市性」（代表板垣雄三、私は経済部会の主査）に参加（成果は同名図書として1991年に出版）。この頃、コンピュータが出回り始めた時期で、科研費では NEC の PC 購入が奨励（義務付け？）され、自分が政官業学体制の中にいることを実感。

1989-91年

1989年に鶴見和子らの研究会の成果『内発的発展』に巻頭論文「内発的発展論の起源と今日的意義」を執筆。本書は総合研究機構の NIRA・東畑精一記念社会科学優秀図書賞を得る。内発的発展論のマニフェスト。

この時期からほぼ2-3年に1つの割合で研究調査のプロジェクトを立て、途上国の現地調査を行う。初めはトヨタ財団の助成を得て、今述べたフィリピン、ネグロス島で飢饉救援事業としてこの島に集中した外国援助の効果を JCNC の調査研究として調べ、『援助と自立』（同文館、1991年）として刊行。

1989年7月

日仏間の学术交流の功勞により、フランス政府から大革命200周年記念の教育文化シュバリエ勲章 (Ordre des Palmes académiques—Chevalier) を受ける。

1990年

大来佐武郎、広野良吉らと国際開発学会創立に参画、以後同学会理事、NGO部会責任者（1994年まで）を勤める。2005年秋、副会長に選任。同学会15周年記念の国際開発叢書第5巻『グローバリゼーションと国際開発』（日本評論社）の共編を担当する。

1990年

ハンガリーで共産党政権が崩壊した直後、ブタペスト経済大学と名を改めた旧カール・マルクス大学に招かれ、講義。帰途、未だ存在していたベルリンの壁を、崩壊直前に東西両サイドから見る貴重な体験をした。

1991年5月

かつて学んだパリ大学高等研究院 (Ecole Pratique des Hautes Etudes EPHE) が社会科学高等研究院 (Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales EHESS) と改名、招聘され、日本経済を講じる。

1991-93年

文部省科研費により、中国山東省を拠点に、渤海・黄海経済圏の状況を調べ、成果を『中国開放体制のゆくえ』(有信堂, 1994年)として刊行。

1991年4月

政治経済学部教務主任として学部改革に当たる。これまで政経の教員は定員割れでずっと70数人だったが、5か年計画で105人に増やす教員強化プロジェクトを実施。また、入試改革を行う。これまで政経の新入生は約1000名中、付属高校からの推薦入学者が3割を占めていた。同時に一般受験では一都三県出身者の比率が6割を越え、早稲田の財産とも言うべき地方出身者の比率が落ちていた。少子化時代を迎え、大学間競争が激化するのを見越して、一般入試分から約170名を全国から推薦入学させることにした。1都道府県当たり3名+ α だが、これを各県に割り振る(その場合には県庁所在地の有名校に割当てが集中する)のではなく、朝日新聞社の『民力』に基づいて、各県内の主要地域(例えば、福島県であれば、福島、会津、郡山)を選び、それぞれ1校を割り振ることによって地域の俊英に道を開くことにした。これは、内発的発展論の大学の場合における実践である。

1991年8月

金大中との会見以来、韓国には17年間入国できなかった。後の、金泳三内閣で資源相となる金泳鎬が慶北大学でのシンポジウムに招待状を出してくれ、盧泰愚政権下でようやく韓国に再入国。金大中は間もなく大統領となり、私の日韓往来も自由になる。

1994-96年。

タイ旅行時に過疎化し、荒廃した農村地域に緑の青々とした一角のあることに関心を持ち、地方で活動している開発僧の思想、行動、事跡をチュラロンコーン大学スリチャイ助教授らと調査。西川・野田真里編『仏教・開発・NGO』(新評論, 2001年)として出版。(村田財団, アーユス, 日本ASEAN学術交流基金助成)

1994年6月

フランスの最高学府コレージュ・ド・フランスで、レイモン・バール前首相の司会の下、フランソワ・ペルー財団の特別公開講座「日本経済モデルの改革」を行う。この講義は“Le modèle de développement au Japon” (La Fondation François Perroux, 1994)として公刊。

1995年

コペンハーゲンで開催された世界社会開発サミット(WSSD)にNGO代表としては初めて日本政府代表団の一員として参加(他に北沢洋子と連合代表伊藤裕禎の計3名)。1994年初頭からWSSDの準備のために社会発展NGOフォーラムを40余のNGO, NGO協議体を集めて開き、勉強会、政府への提言を行ってきた。WSSDの際にはNGOフォーラムの場で、「日本分科会」を開催した。武者小路公秀国連大学副学長(当時)、勝俣誠明治学院大学教授らも出席。社会発展NGOフォーラムの仕事は2000年代

に入り、世界社会フォーラムの日本 NGO 会議に受け継がれる。この時期の研究を編著『社会開発』（有斐閣、1997 年）で公表。

1995 年 8-9 月

北京大学経済学院客員教授として「日本経済論」を集中講義。初めて中国でキャンパスの中ではあるが、生活体験を持つ。キャンパス内でトラックに後ろから衝突され、肩をけが。中国は 1972 年来、毎年 1-2 回は訪問してきたが、生活すると旅人とは違う厳しい中国の姿が見えてくる。

1996 年 8 月

チュラロンコーン大学政治学部客員教授として「日本経済論」を講義（国際交流基金の派遣）。

1994 年 11 月-98 年 10 月

早稲田大学理事（国際交流・エクステンションセンター担当）。奥島孝康総長の下で国際交流・成人教育を担当。早稲田大学の学術協定校をこの 4 年間に約 32 校から 116 校へと 3 倍以上増やす。また、同じ期間にエクステンションセンターの会員数は 1 万 4000 人から 2 万 3000 人に増え、社会人の成人教育への熱意の高まりを実感する。

97 年からは理事兼任で、早稲田大学最初の独立大学院アジア太平洋研究センター・同研究科設置室長として設立準備に奔走。新設の大学院アジア太平洋研究科は、早稲田大学の大学院教育重視時代へのシフトの先鞭をつける。大学院アジア太平洋研究科は 98 年 4 月の設立時は、募集人員 200 名に対し受験者 482 名（4 月 1 月期計）。大学院レベルでは受験者が採用人員の 2 倍以上あれば、先ず優秀な院生を確保できるので、滑り出しは上々の成績である。今日では修士・博士課程の在籍者 765 人、うち留学生 4 割、女性 4 割、職業経験者 7 割で、社会人、留学生、女性を重視する新しい国際関係大学院として、日本の社会科学高等教育の最先端に立っている。アジア太平洋研究科では、「開発、人権と平和論」、「経済発展論」を担当し、「開発、人権と平和」（修士）「国際平和と人権」（博士）の研究指導を行う。

1996-2000 年

日本経済新聞社「日経アジア賞」審査員。

1998-2003 年

トヨタ財団「市民社会」部門助成審査委員長。

1998 年 10 月

ユネスコ本部と早稲田大学の共催で「開発と文化」国際会議を早稲田大学国際会議場で開催。ルルデス＝アリスぺ事務次長ら海外ゲストを迎え、ユネスコ報告書“*Our Creative Diversity*”に基き、討議を行った。

1999 年 2 月

父西川満が 91 歳で永眠。都内のシンポジウムの席上で電話を受け、河北病院に駆けつける。父の著書、蔵書一式を台湾台南市麻豆地区にある真理大学台湾文学資料館（張良澤館長）の西川満文庫に寄贈。また、寄せられた香典を原資として「西川満記念奨学金」を設け、台湾からタイヤル族出身の先住民留学生を早稲田大学に招く。その後、フランスの政治学院客員教授としてパリ滞在時に咽喉の異状に気づき、7 月に東京女子医大病院・耳鼻咽喉科で診断を受け、咽頭ガンの診断を受け直ちに入院。この時、最

初行った病院では舌を切除すると言われ、東京女子医大では耳鼻咽喉科（吉原俊雄教授）、形成外科（野崎勤教授）の連携で舌が保存されることになった。セカンド・オピニオンの重要性を実感する。2ヶ月間の放射線、化学療法で患部を小さくした後、11月に手術。2000年1月に退院する。舌根を切除し、前腕の筋肉を移植する15時間に及ぶ大手術で、当面は発音不明瞭、嚥下困難の時期が続く。

1999-2000年

文部省科研費「アジアの社会発展—経済危機との関連」で、アジアの市民社会調査を始める。2003年秋の「アジアの市民社会」国際会議はこの時築いた研究ネットワークを土台に開催したものである。

2000-2005年3月

政治経済学部在籍の最後の時期。パワーポイントを用いて講義を行い、リハビリを行う。また、この時期にはオープン教育センターで全学部生向けの「平和学」、「国際開発援助」、「開発と平和」（演習）、「東アジアの市民社会と民主化」（大学院演習）等の学科目を開設、担当する。

2001年2月

フランス共和国より教育文化オフィシエ勲章 (Ordre des Palmes académiques—Officier) を受賞。

2001年8月-2004年3月

西安交通大学西部発展研究センターと共同研究「中国西部開発と持続可能な発展」を始める（早稲田大学特定課題研究費、文部科学省科研費）。以後、3年間にわたり、陝西省を拠点に雲南省、四川省、貴州省、寧夏回族自治区、湖北省、甘粛省等、中国の内陸部黄土高原地域の諸省を調査研究する。その成果を同名書（編著、同友館、2006年）として刊行する。

2001年

前年に出版した『人間のための経済学』（岩波書店）で国際開発研究・大来佐武郎賞、また2002年3月に早稲田大学の大隈学術記念褒賞を受賞する。博士（学術）号を早稲田大学より受ける。

2002年4月-2007年3月

早稲田大学で初めてのCOEプロジェクト「現代アジア学の創生」（COE-CAS、毛里和子代表）に参加。「アジアの社会開発」研究会を主催。研究成果は2007年に「東アジア共同体の構築」5巻（私は第3巻「人口移動と社会変容」を平野健一郎と共編）として公開。

2002年5月

母澄子が他界。父と共に都宮小平霊園に眠る。

2003年4月

広島市の寄付による広島・長崎連携「平和学」講座を多賀秀敏教授（社会学）と共にオープン教育センターの場で開講、退職時まで継続する。開講以来3年連続して、全学からの登録学生300名、抽選をする盛況で、学生たちは最後までほとんど減らない熱心さ。

2003年5月

内閣府福田康夫官房長官より男女共同参画功労賞を受賞する。

11-12月、米国ポートランド州立大学客員教授（日本・アジア経済論）。秋の3ヶ月赴任の筈が、9.11事件の余波でビザが遅れ、丸1ヶ月半の滞在に縮まった。「世界で最も豊かな国」の人々が日常的に不安

に怯えている状況を目の当たりにする。

2003年10月

新設された台湾研究所の所長に就任。退職時まで民主化が進む台湾との学术交流、相互理解の増進、台湾理解教育（「台湾を知る」講座等）、市民交流事業の推進等に努める。本研究所の台湾側推進者、台北駐日経済文化処代表（大使）、羅福全は大学院修士課程での同期。羅代表やその後を継いだ許世楷代表は当時、独立運動の指導者で、長年中華民国大使館より旅券を取り上げられ、台湾に入国できなかった。その同じ人物が駐日大使になるのだから、世の中の有為転変の激しさに改めて感動する。

2003年11月

早稲田大学国際会議場で「アジアの市民社会」国際会議を主催（外務省日本ASEAN学术交流基金助成、成果は明石書店より2007年に出版）。この時期には社会発展の主要アクター、市民社会を研究テーマとする。グローバル化時代に「グローバル市民社会」の役割が世界的に重視されながらも、アジア民主化の担い手としてのアジア市民社会研究が遅れていることを痛感し、アジアからの世界への市民社会研究発信をめざす（『人間の顔をしたグローバリゼーション』日本経済新聞社、2007年）。

2004年6月

デンマークのオルボーで開かれた「持続可能な都市・自治体」会議に出席。ヨーロッパでの住民参加の下での持続可能な都市作りの進展に感銘を受ける。

2005年2月

チュラロンコン大学大学院国際開発コースで「内発的発展論」を教授。

2005年4月

長年勤めた政治経済学部から大学院アジア太平洋研究科に移籍。この時点で大学院の指導下の院生は45名、内10名が博士課程で、2003年来3名の課程博士を出すことができた。

2006年9月

西安交通大学客員教授として、「西部開発と持続可能な発展」「地域格差をどう是正するか—調和社会への道」「アジアの市民社会と社会発展」を講義。北京大学、青島科学技術大学、上海師範大学でこれらのテーマで講義。

2006年11月

第8回日仏経済学会議「東アジア共同体とヨーロッパ」をパリ第10大学で（ナンテール校）開催。

2007年1月

早稲田大学政治経済学部、大学院アジア太平洋研究科で最終講義「開発学への開眼（目ざめ）—私の学問遍歴」。

2007年

台湾研究所の研究成果を『東アジアの市民社会と民主化』、『東アジアの社会運動と民主化』（西川・蕭新煌共編著、いずれも明石書店）等のシリーズとして刊行。

2007年3月

早稲田大学を定年退職。高等学院、政治経済学部、大学院修士課程、博士課程、政治経済学部教員と

西川潤教授年譜

通算して6度目の卒業となる。この間、政治経済学部演習33期約660名、経済学研究科修士60名、博士1名(松島泰勝『島嶼経済論の研究』—藤原書店より出版)、大学院アジア太平洋研究科での修士95名(内、小野梓記念賞受賞者1名:大路紘子「中国打工妹之家の研究」)、博士3名(阪本公美子“Social Development, Culture and Participation. Toward Theorizing Endogenous Development”2003、タライボサ・ウエレニ“Ecotourism Development in the South Pacific Islands”2005、鈴木弥生『バングラデシュの農村における援助と社会開発—クミッラ県における農村移住者へのインパクト』)が巣立つ。稲門西川会の会員は850人を越える。

今、この年譜を省みながら記して、父母の愛、師友や同僚の適切な指導、忠言と支援、学生諸君との対話とそこから受ける刺激、そして社会からの温かい眼と激励が、一人の研究者の成長にいかに欠かせないものであったかを痛感する。また、学院の時から1人の若者を教育し、学びと社会ネットの場を提供し、常に自由な研究と教育の場を通じて社会と世界で活躍する場を与えて頂いた早稲田大学の大きな包容力には深く感謝している。改めて、皆様に心からのお礼を申し上げたい。

(西川 潤 記)